謹みてこの記録を殉職、殉難された六十一柱の霊に捧ぐ

＜ごあいさつ＞

尊い二次災害の犠牲

土佐山田町長　野　口　陽　美

この度の繁藤地区の集中豪雨による異常大災害に対しましては、建設、厚生各大臣、衆参両院の災害対策特別委員をはじめ、町内は勿論県内外各方面からあたたかい御見舞に預り、その上復旧作業に関するあらゆる御援助をいただきまして、まことにありがとうございました。

犠牲となられた消防団員、消防署員、町議会議員、町職員や一般協力者の方々に対しましては哀悼のことばもなく、ひたすら衷心からその御冥福をお祈りする次第であります。繁藤の山くずれによる被害は、1人の人命を救助中に起った二次災害でありまして、その犠牲の性質がいかに貴いものであるかを十分認識しなくてはなりません。

町は県を挙げての御支援、建設省、国鉄、自衛隊、さらには業界の御協力によりまして，一刻も早く遺体の収容を第一義として、悪条件を克服しながら懸命の努力を続けました。1日3回の現地災害対策本部の合同会議による救出作戦会議も、降りつづく雨にはばまれて、まことに悲壮でありました。あと三体という時点になって易者の占いも、千体流しの供養も、1人の人柱も残さない願いのほら貝の吹鳴も試みました。遺体発見という一事に私たちは心身をすりへらしてこれに全力を傾注いたしました。

第二には犠牲者に対する補償措置、遺家族への補償、援護について県と共に国に対してあらゆる努力を続け、犠牲者に対する賞じゅつ金、特別褒賞金、遺族に対する補償年金、同一時金、遺児奨学金などについて格別の配慮を得ましたことは感激の極みであります。8月18日、悲しみのうちに厳粛盛大に町葬執行、9月22日には叙勲並びに表彰状の伝達を行ないました。

今後私たちは再びこのような惨事を繰り返さないよう厳重に注意し、かつこの災害を町内外の御協力によって収拾し得ましたことを後世に伝え、御援助下さいました各位に満腔の感謝を捧げるものであります。

高知行きの列車が高松駅を発車してから約二時間、大歩危、小歩危の景勝の山峡を縫って、あと二十九㎞で高知駅に着く地点に繁藤駅がある

車窓から余ほど首をかたむけて仰がないと、天を見ることが出来ない。古い地名の天坪（あまつぼ）という地名は、こんなところから出てきたのだろう

標高三〇〇ｍ、平地より平均気温は五度も低いという。静かな過疎の町、助け合うことを生活の知恵として来た純情素朴な山の人たちの隣人愛が、一人の命を救うために大きな犠牲を生んで、悲しみに沈んだ

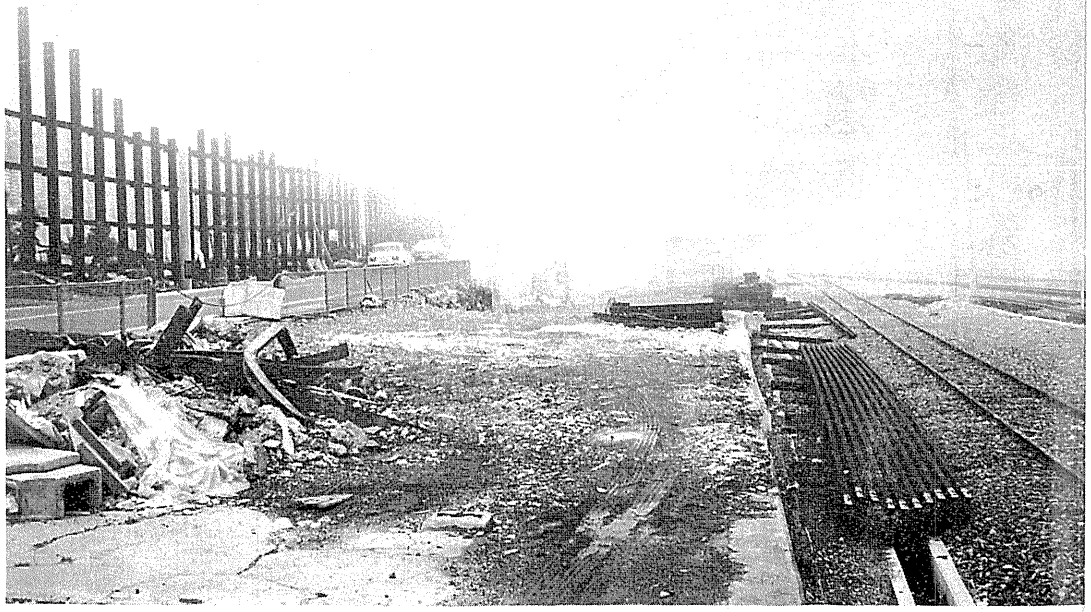
『ぼくは、もう山がある所に住むのはいやだなと思いました。』

『雨がふる日は、あの日のことを思って、かなしくなります』

山の子たちは作文集にこう書いている

汽車もはしり出した。国道三十二号線もつながった

しかし、山の子たち、肉親を失った子たちの心をつなぐのは、まだ遠い――

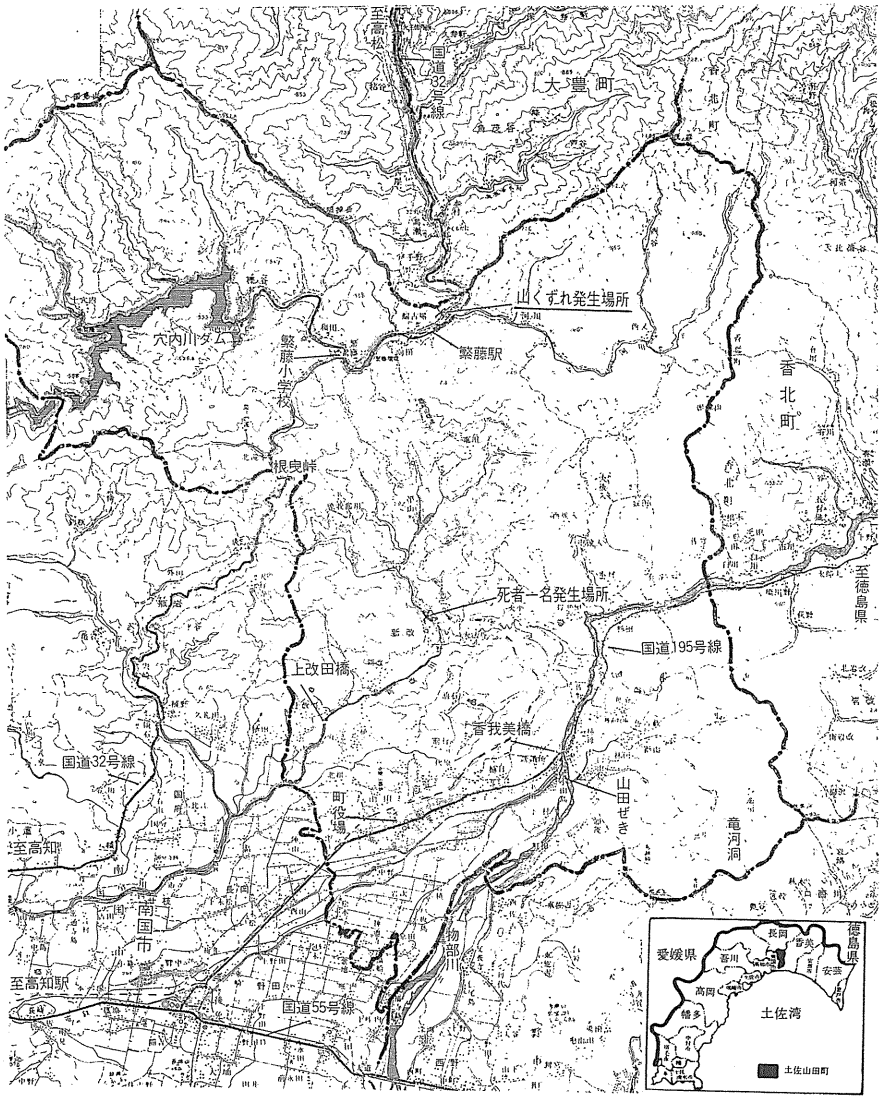


＜写真は霧に包まれた繁藤災害現場＞

（四十八年五月）

町のすがた

土佐山田町全図



地　勢

土佐山田町は、高知市の北東約16㎞の高知平野の台地に位し、遠く太平洋を望む平野部と四国山脈の前衛となる山々の起伏が始まる山岳部にわかれる。昭和29年9月6カ町村が合併、土佐山田町と改称。その後、隣接4カ町村の一部を編入、現在に至る。

町内の主たる特産物は、ハウス園芸による農産物、杉、桧、松などの苗木の生産、また土佐打ち刃物として全国的に販路をもつ、山林用ノコギリ、オノ、鎌、ステンレス包丁などがあり、県下の約70％近い生産を占める。

平野部では水稲の2期作が行なわれ、年間100万人の観光客で賑う史蹟「天然記念物・龍河洞」がある。

〔位　　置　東経133度36分、北緯33度36分、東西12.4K、南北11.2K〕
〔面　　積　110.98㎢〕　〔人　　口　22,616人、7,328世帯〕
〔役場所在地　〒782　高知県香美郡土佐山田町宝町1丁目2番1号〕
〔町の機構　町長　野口　陽美、助　役　都築　　潔、職員数241名〕
〔町　議　会　議長　時久　　清、副議長　野村　益吉、議員定数26名〕

繁藤地区とその地勢

土佐山田町繁藤の地は終戦前までは天坪村（あまつぼむら）であったが戦後、町村合併により大豊村となり、昭和31年現在の土佐山田町に分離合併したものである。（あまつぼ）というこの地名については、（つぼ）は所謂（壺）であって、四方を高い山で囲まれた中を穴内川が北流して凹谷をなし、その形が壺に似ており且つ土地が非常に高いところにあるから（あまつぼ）とは『土地が非常に高くて且つ壺のように凹形をなしたところ』と云われている説と（アマツボ）のアマは古語のアマ又はアメであって天の字を当てるのが本体であり、我国の神話に有名な（天の岩戸）や（天の浮橋）等のように古代によく使われた言葉であって、地上より高く離れたところを意味し、ツボも同じく古語であって庭のことを云い（今でも田舎では家の庭をツボという）一定の場所を表わす言葉であるという。

それで（アマツボ）はもと（アマツボ）または（アメツボ）と呼ばれたもので、この言葉は非常に古く且つこれは高いところと云う意味より起ったものであるという。また一説には当地方は昔より雨が頗る多いためであるとも云われ、それを裏付けるように天正の地検帳以来明治の初年に至るまでの記録には、いづれも**雨坪**と雨の字を当てている。これらの諸説はいづれにせよ土地が高く雨の多いところより起ったことは間違いないようである。繁藤大災害の発生した場所は、この雨坪名（あまつぼみょう）の中角茂谷より土佐山田町に分離合併して繁藤地区となった追廻し、河之川の二部落の追廻しである。さらにこの追廻しと接して続く旧来の繁藤部落もまた、西北に国見、黒森の森林地帯を控え多雨多濕、このため不思議に藤が繁殖して、昔は初夏の候、紫の花房が山野を彩り芳香は谷間にみちていたので（しげとう）と呼ばれたと言われ、あるいはまた、土地高峻な峠（とうげ）と云う意味より起ったともいわれるところである。

（町立繁藤小学校校長・溝淵　忠廣）

地　質

もろい岩とわき水の相乗作用か

この附近の地質は、秩父古生層と呼ばれる約2億年近くまえの、海底の堆積物よりなり、地質専門者の概査によれば、上部よりチャート（珪酸を80％以上含んだ細粒の堆積岩）、粘板岩（古生層・薄くはがれやすい性質）および砂岩（砂粒が固まってできたもの）の3つのグループに分けられ、弱い古生層である。

崩壊地付近には、幾つかの断層が存在し、大小の割れ目が梁部まで発達している。地表から約5㎞は風化が進んで、粘土化しており、下部は風化した岩盤である。地層の傾斜は約45度で、山腹傾斜面に対して〝受け盤〟となっている。しかし、劈開面は斜面にほぼ平行に発達している。

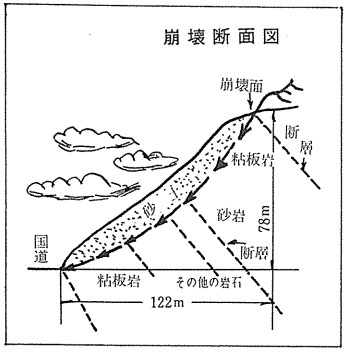
くずれたのは追廻山（標高約150㎞）で、国鉄土讃本線と国道32号線へ張り出した斜面が、高さ約80㎞、幅140～170㎞にわたってくずれ、土砂約10万㎥が流出した。

とくに約45度の傾斜層の間には、地下水の通路になったとみられる断層破砕帯（硬い岩と軟らかい岩の間にできる細かい岩の層）が確認された（災害科学総合研究班の調査より）いずれも風化が進み、すべりやすい状態となっていた。

地下水

地下水（わき水を含む）は崩壊した斜面の上部先端から北北西約50㎞と、北北東約100㎞の2カ所の谷あい（いずれも水田跡）に、多量にあった。一方、くずれた斜面のわき水は事故の10日後まで続き、とくに左上の最も深く削られた断層破砕帯では、1分間に240リットルにのぼった。

崩壊の原因は気象台はじまって以来の集中豪雨が、谷の部分の断層破砕帯を通路にして崩壊した斜面に入ったうえ、風化してもろくなった基盤の岩石をゆるめ、さらにわき水が〝すべり油〟になり、これらの相乗作用によって、岩盤上の土砂がどっとすべり落ちたと推定される。



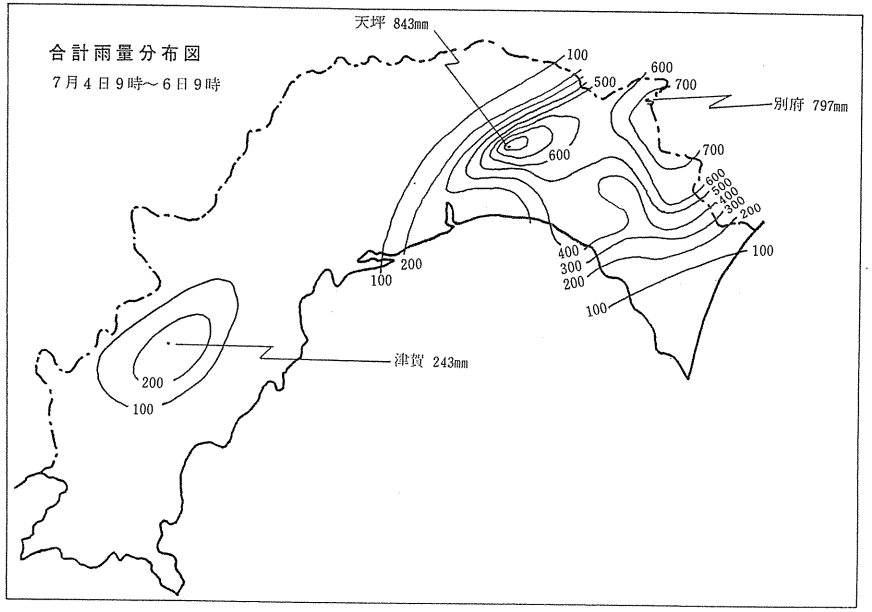
気象概況

そのころ雨雲は……

47年6月30日から7月2日にかけての気象状況は、梅雨前線が非常に弱まり、高知市の最高気温は30℃を越し、つゆ明けを思わすような天気であった。その後黄河下流域に発生した低気圧が東進し、5日朝には日本海西部へと進んでいた。

一方太平洋高気圧はゆっくり西進し、暖い湿った空気のかたまり〝湿舌（しつぜつ）〟が、四国山脈の南西斜面に吹きつけ、局地的集中豪雨を生む気象となり、7月3日午後から、にわか雨の降りやすい天気となった。

7月4日の気圧配置は、前日とほとんど変らず、午後から弱い雷をともなったにわか雨が、県の中央部および北東部付近に降りはじめた。この雨は短時間で止んだが、20時ごろから急に、同上地区で強いにわか雨がはじまり、2時間ぐらいで終わり、夜半前から星空が見えるほどになっていた。



その後、小康状態がつづいたが、7月5日、4時ごろから県中央部と北東部で、再び強い集中豪雨となり、5時より6時の間には、95.5㎜と最大を記録し、4時から9時までの5時間の降雨量は、すべて時間雨量50㎜以上で、386㎜という驚異的な記録となっている。

今回の異常気象の特性は　①…高温多湿の南西気流による局地的な集中豪雨であった。

②…この雨は三群に大別できるが、ともに幅10㎞～15㎞の線状のもので、同じ場所に停滞した。

＜第1群＞　高知市から繁藤およびその北東にのびる雨域（4日15時から4日21時まで）

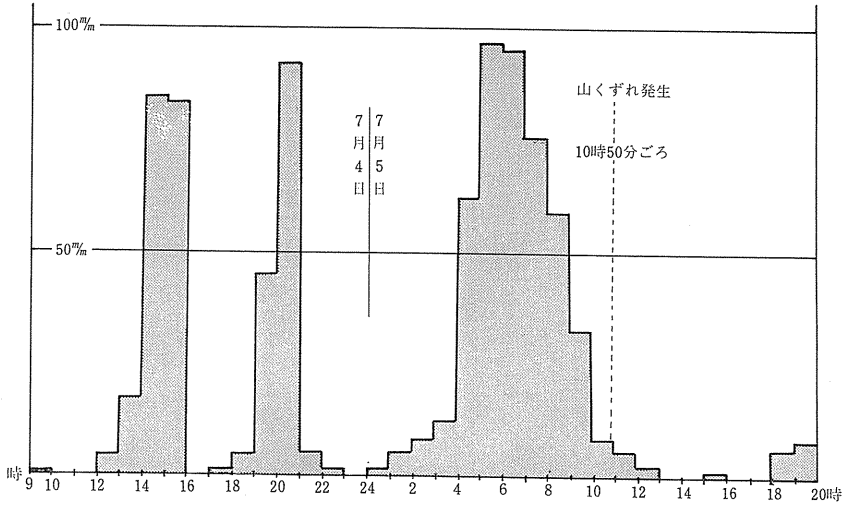
＜第2群＞　繁藤付近およびその北東にのびる雨域（5日4時から5日11時まで）

＜第3群＞　安芸市を中心とする県東部の雨域（6日1時から6日9時まで）

第2群の雨の勢は強く天坪（あまつぼ）（土佐山田町繁藤）における5日5時から6時までの1時間降水量は95.5㎜、6時から7時までの1時間降水量は95.0㎜であり、4日9時から5日9時までの同所の日降水量は742㎜に達し、従来の記録694㎜（佐喜浜・昭和41年5月21日）を更新した。なお、この742㎜は気象庁開設以来、史上10番目の記録であるという。繁藤追廻山の大規模な山くずれはこの時発生した。

（第三群の雨域でも日降水量411㎜に達し、安芸川、伊尾木川の支流の堤防が決壊したほか、各所で山くずれが発生した。）

7月4日・5日の時間雨量グラフ



土佐山田町における昭和47年7月豪雨被害並びに復旧一覧表

区分	内容	単位	数量	被害額	内訳 繁藤地区 数量	繁藤地区 被害額	その他の地区 数量	その他の地区 被害額	小計
				千円		千円		千円	千円
土佐山田町	死者	人	61		60		1		
	負傷者	〃	7				1		
	全壊	棟	10		10		0		
	半壊	〃	10		1		9		
	一部破損	〃	124		98		26		
	床上浸水	〃	151		145		6		
	床下浸水	〃	673		51		622		
	町道	個所	5	4,118	0	0	5	4,118	
	農道	〃	22	2,790	0	0	22	2,790	
	林道	〃	23	1,869	9	750	14	1,119	
	農業施設(頭首工 水路)	〃	59	22,400	11	4,142	48	18,258	
	農地	〃	125	8,325	30	1,500	95	6,825	
	農作物	ha	46	13,275					
	河川	個所	8	10,014	4	5,944	4	4,070	
	がけ崩れ	〃	16	14,784	2	1,750	14	13,034	77,575
高知県	農業施設(頭首工)	〃	1	50,601	0	0	1	50,601	
	河川	〃	17	127,840	1	99,000	16	28,840	
	橋渠	〃	2	130,000	0	0	2	130,000	
	県道	〃	11	10,640	1	700	10	9,940	
	治山工事	〃	1	98,457	1	98,457	0	0	417,538
建設省	国道32号線	〃	2	51,781	2	51,781	0	0	51,781
国鉄	施設復旧	式	1	301,000	1	301,000	0	0	
	車輌	輌	5	87,200	5	87,200	0	0	388,200
電々公社	電信施設	式	1	6,079	1	6,079	0	0	6,079
四国電力	電気路線	〃	1	2,387	1	2,387	0	0	2,387
合計				943,560					943,560

47年7月集中豪雨災害救助費

内訳	数量	金額
		円
避難設置費		60,000
応急仮設住宅設置費	10 戸	3,204,830
炊出し食品給与費	44,616人分	5,640,190
災害にかかった者の救出費	61 人	1,521,185
住宅の応急修理費	4 世帯	286,400
埋葬費	60 体	1,851,035
死体捜索費	61 体	4,270,969
死体処理費	60 体	1,626,189
障害物除去費	4 世帯	75,600
輸送費		1,670,000
人件費		3,464,500
合計		23,670,898

復旧経費と経過

	復旧経費	復旧の経過 1線開通	2線開通	完全復旧	付記
	千円				
国道32号線	51,781	7月25日	8月29日		
土讃本線	301,000	7月28日	8月10日	10月13日	
電々公社	6,079	応急 7月13日		48年 3月31日	
四国電力	2,387	7月5日 18時		48年 4月20日	

災害の及ぼした影響

災害の発生と同時に、高知県の動脈と云われる国鉄土讃本線、国道32号線は分断され、このため松山、または室戸岬経由の大う回路となり、復旧に至る20数日間は日常の足は奪われ、流通機構も乱れて、県下全般に大きな影響を与えた。

国鉄土讃本線では、事故発生以来、一線開通の前日（7月27日）までに特急46本、急行597本、ローカル421本、貨物403本、合計1,467本の列車が運転不能となった。バス、トラックによる松山経由の代替輸送、通勤通学者のバス連絡、旅客のキャンセルなど間接被害額は、実に2億2千万円に達した。

輸送ルートの延長によりハウス園芸、鮮魚の出荷物は、混雑する輸送便の確保、鮮度の低下など農漁民に大きな打撃を与え、同時にまた消費物資の流通ルートの変動は、商工業者や消費者にも少なからず影響を及ぼした。

また、足摺岬の国立公園への昇格、新幹線岡山駅開業などによって大巾な伸びが予想されていた県下の観光地は、軒なみにキャンセルが相次ぎ特に年間100万人の観光客を数える土佐山田町の「龍河洞」も予約の取消しなど損害額は約2,000万円にのぼり交通網の復旧後も、この影響は暫らく続いた。

これらの経済的な損失とは別に、災害がもたらした精神的な苦痛は町民のひとりひとりの計り知れない深い痛恨として、また献身的な救援活動や、全国から寄せられた数多くのあたたかいご厚情とともに、長く忘れ得ないものであろう。

繁藤災害を契機に、全国的に危険個所の総点検が行われているが、抜本的な防災計画の早期着工により、再びこのような惨事を繰り返さないよう、望まれている。

資料提供者芳名

高知県警察本部、土佐国道工事事務所、高知地方気象台、天理教高知教務支庁、天理教繁藤大教会、国鉄四国総局、高知県、高知新聞社写真部、陸上自衛隊善通寺駐とん部隊、町立繁藤小学校その他たくさんの方々にご協力いただき心より厚く御礼申し上げます。

（敬称略・順不同）

あつくお礼申し上げます
ありがとうございました

山上までけずり取り、完全な治山工事が行なわれた現在の追廻山。土石流防止に打ちこまれた国道すじのH鋼の林立する風景は、六十柱の犠牲を象徴しているかの如く痛ましい
（繁藤駅・陸橋から写す）

秋には慰霊塔も

『くずれ落ちた断がいに、再び緑がよみがえるとしても、かけがえのない肉親のあたたかい手にふれることはできない一』と、岡村教育長は繁藤遺児の感想文集に序の言葉を記している。『殉』の字は〝国家、社会のために生命を捧げる〟こと。国が叙勲された意義は大きい。遺児たちがこの誇りと、あたたかい社会のはげましをささえとして仰ぐ慰霊塔が建立される日も近い……

繁藤駅構内の仮の慰霊塔